

はじめに

## ●「アホヤジ…」

以前、ある小学校の特別支援学級の授業を見に行ったときの事です。人懐っこい数人がすぐ近づいてきて、「あんた、誰?」「どこから来たの?」と質問を連発します。やりとりで笑いがいくつか起こった頃、視線をそらして離れたところにいた別の子(ヨウ君)がすっと私に近寄り、こう言いました。「あんた、銀歯ですね!」。突然の言葉でしたが、彼が笑っている私の奥歯を見つけたことがわかりました。その着眼点のユニークさと観察眼の鋭さに驚いたことを覚えています。

ヨウ君はその頃、大人の女性には必ず「あんた何歳?」と聞くことがありました。あるお母さんが「48歳です」と言うと、彼は即座に「あと12年で死にます」。周りは「えー!」とびっくりしました。しかし、後で彼のおばあさんがその少し前、60歳で亡くなったことを知りました。彼はおばあさんの死から女性が死ぬのは60歳とし、60-48=12年という計算をしたことがわかってきました。

いずれも、相手が嫌がるかもしれない発言という意味では、相手の心を理解していないようにみえるユニークな言動です。しかし、このようにそれぞれの発言は彼にとってちゃんと意味があるものだったのです。先生はそんな彼をとてかわいく、おもしろく感じるようになります。そして、ヨウ君の言動の意味を一つひとつ楽しそうに一緒に考えてくれるようになります。そんな先生を彼も気に入ります。

あるとき、彼は先生を見つけると突然「石の上にも…」と言って黙り込みます。先生はひらめいたように、「(石の上にも)3年!」とことわざの後半を言ってくれる。すると彼がにたつと笑う。こういった言葉遊びが、彼と先生との楽しい世界の共有になっていきます。先生がそのことを他の先生にも伝えることで、彼は次第に、いつも立ち止まって相手をしてくれる先生に近寄り、ことわざの上の句を言って黙ります。相手に下の句を言うってもらう遊びを仕掛けるようになったのです。

楽しい世界を共有できる相手ができ、それが広がる。そのなかで彼自身に笑顔が増え、また遊びをしてくれる相手の表情を伺う(こうすると先生はどう反応するか、その表情や態度をじっと見ている)場面がみられるようになります。これはまさに、彼が相手の心に興味をもち、それを知ろうとする姿と考えられるのでした。

## ●「別府先生、鼻くそ、ほ…」

ヨウ君と10年後に再会したときです。にたつとして近づく彼を見て、またことわざの上

の句を言うのだろうと予想していた私に、彼はこう言いました。「別府先生、鼻くそ、ほ…」。私は予想とまったくちがう言葉に、とても面食らい、「え??？」と目が点になりました。すると近くにいた彼のお母さんが、私に耳打ちしてくれました。「昔、息子が鼻に指を突っ込んでかき出す（ほじる）のをやりすぎて鼻血をよく出したことがあったでしょう。それで困って、先生に『ヨウ君、鼻くそ、ほじりません』って言ってもらったことがありますよね？ それじゃないですか？」。

これは10数年前、数回言っただけのことでしたが、そういえば、と私も思い出しました。それでタイミングはずれましたが、「鼻くそ、ほ」…じりません」と彼に答えました。すると彼は以前のように、本当にうれしそうにたっと笑ったのです。彼が同じ言葉遊びでも、既存のものではなく、自分と相手との経験からつくり出した言葉を使ったことに、とても大きな成長を感じました。

## ●「別の顔」を知ろう

自閉スペクトラム症児者は、人の心を理解するのが苦手。だから、コミュニケーションがうまくできない。そのため支援として心の理解を教えることが重要であると言われたりします。しかし、コミュニケーションは、二人（双方）がわかり合うことで成立するものです。そう考えれば、コミュニケーションを深めるためには、自閉スペクトラム症児者に障害のない人の心を教える方向ではなく、障害のない人が自閉スペクトラム症児者の感じている世界を知る方向もとても大きな意味をもっているはずなのです。そして、さきほどのヨウ君の例のように、彼・彼女らが感じている世界は、そのなかに一歩立ち入ると、とても魅力的でおもしろいものをいっぱいもっています。

目の前の自閉スペクトラム症児者が感じている世界を知ることが、私たちがそれまで知らなかった（見つけることができなかった）彼・彼女らの「別の顔」を教えてくれるきっかけになります。そして、それが自閉スペクトラム症児者との私たちの関わりを、少し柔らかくしてくれることがあるのです。この本では、私が出会った人や実践を紹介することでその一端を一緒に感じていただければうれしく思います。